

信濃国分寺跡

史跡保存環境整備事業に伴う発掘調査の報告

(昭和45年度) 1970

上田市教育委員会

例 言

1. 本報告は上田市が国ならびに県の援助により、昭和45年度に、信濃国分寺跡の史跡保存環境整備の事業として行なった調査の結果をまとめたものである。
2. 本調査は、前年度につづき、斎藤忠博士が中心となり、米山一政、川上元両氏が参加し、また五十嵐幹雄氏も随時参加した。
3. 本原稿は、斎藤忠博士、米山一政氏の執筆にかかるものである。
なお図面等を添付することはできなかったが、これらは川上元氏が主となっ
て行なった。本報告書の公刊の際に掲載したい。
4. 本調査に際しては、上田市教育委員会の原昌孝、宮下温、内藤政則氏が終
始協力した。

1. 調査の目的とその経過

今回の調査は、国分僧寺について、金堂跡の内部の規模を明らかにすること、塔跡を確認すること、及び金堂、講堂をむすぶ南北中軸線の東がわの廻廊のそと地域について建物の有無をたしかめることを目的とした。幸いに、塔跡については、中心礎石の根固め栗石を発見してその位置を明らかにすることができた。又 南北中軸線の東方の地域については、僧房跡とも考えられる遺構を確認することができた。調査は、昭和45年11月20日から12月4日にわたって行なわれた。

次に、それぞれの建物跡について調査の結果を概述しよう。

1. 金 堂 跡

① 調 査 の 目 的

信濃国分寺金堂跡の調査は昭和38年信濃国分寺跡オ一次調査の際始めて行なわれた。

その時の調査は従来金堂跡と考えられていた礎石現存の基壇の現模の調査に主眼をおいたが、調査中、たまたま、現存基壇の南に、現存基壇の周りに遺存していた石組溝と同様な石組溝を遺存している別の基壇の跡が発見され、従来金堂跡と考えられていた基壇は実は信濃国分寺僧寺の講堂跡の基壇で、その南に石組溝を遺存している基壇が同寺金堂跡であることが判明した。この時の発掘調査によって、金堂跡の現模は北・西・東三方の石組溝の所在に依って、石組溝は東西の長さ32.3メートルであることは確認出来たが、基壇西縁の南西隅の部分が鉄道敷地下になり、東縁も東南隅の部分が可成破壊されていたため、石組溝南北の長さを確認出来ないまま、オ一次調査は終わった。

その後41年のオ二次調査の際、金堂基壇南縁の再調査によって、南縁の石組溝の一部残存を発見し、石組溝を除いた遺構の規模は、東西31.4メートル、南北

2.2.4メートルであることが確認できた。

石組溝内側の遺構については、再度の調査によって、石組溝内側に、北縁で1.54メートル幅（南北幅）に玉石が敷き詰めであり、石敷の西端に近い所には、石敷の南側に沿ってその側面に厚さ5ミリメートルの漆喰が塗られた基壇の立ち上りが一部分確認された。しかしその他には、後世の耕作等に依って、上部が削平され、石敷の境目は判明したが、土壇らしいものの側面を遺存するものは見当らなかった。

また西縁では、石組溝の内側に1.16メートル幅の玉石の石敷があり、東縁では中央辺で約1.1メートル～1.3.6メートル幅の石敷があることが確認でき、金堂の基壇は石組溝の内側から、北縁では1.6メートル、東西縁で1.1メートルの地点から基壇が立上っていることと判断された。その結果は、金堂基壇の基部の規模は南北の長さ4.4メートル、東西の長さ3.1.4メートルであることが明瞭した。次に、この基壇内の礎石の有無或はグリ石の有無について、才一次調査の時、想定される位置について坪掘を行なったが、礎石については、講堂基壇上面より金堂跡現在の上面が低位にあって、礎石がない現状から見て、グリ石の存在を予想したが、この時もグリ石の確認は出来なかった。

今度の調査は、以前の調査で未確認となっていたグリ石遺構の調査によって、金堂内部の柱間の距離・間隔を再調査し、本年度整備事業に役立てようとするものであった。

② 発掘調査の経過

発掘調査は11月20日、斎藤忠博士を中心に、本年度整備事業に伴う未確認の地域、金堂跡を含めて、廻廊跡東側の国道と鉄道に挟まれた地域の調査～塔婆跡・僧房跡～の発見に主力をそそぐこととし、その打合せを行なった。

金堂跡の調査は11月21日から始めたが、最初に先年の才一次、才二次調査で判明した金堂跡東・北・西三方の基壇跡周りの石組溝の一部を再発掘し、その輪

郭線を明確にしておいて、内部調査にかゝった。

但し、金堂跡の東北四分の一は仮設の道路数になり、南西四分の一は鉄道の線路数になっているため、西北四分の一と東南四分の一の半分が発掘調査可能であるに過ぎなかった。

従つてこの二地区に東西のトレンチ 2 本づつ入れることとし、西北地区では、北縁の石組溝内側から 3.5 メートル地点から中央寄りに 2.0 メートル幅のトレンチを、同様に石組溝内側から 7.5 メートルの地点から中央寄りの 2.0 メートル幅のトレンチを設定し、西縁石組溝内側から 2.5 メートル、5.5 メートル、9.0 メートル、13.0 メートルの地点を中心とする 2.0 平方の 8 グリットを設定して発掘を行なった。

他方南東四分の一地区では南縁石組溝内側から中央寄り 2.0 の地点から北へ 2.0 メートル幅の東西トレンチと、それから 2.0 メートル隔てて、2.0 メートル幅のトレンチを設定して発掘した。

南東地区の南トレンチに於ては、石組溝内側外から 1.4 メートルは玉石による敷石で、敷石下は茶褐色の土層で、玉石の消滅地点から立上る服築で、その高さは敷石上面から約 0.3 メートルであった。この服築も約 2.4 メートルで終り、それから内方は粘土を含む褐色土で明らかに後世の埋立て土であることが看取された。また、東縁南北中央辺では、石組溝内方に 1.0 メートル幅の玉石の敷石があって、敷石消滅地点に凝灰岩の幅 0.2 メートル、長さ 0.35 メートルの切石が一箇立ててあった。58 年度才一次調査の時、この中央辺の石組溝付近に切石の凝灰岩が散乱していたというから、ここに金堂基壇に登る石段があったものと考えられ、今度の一箇はそれ等の残存ではないかと考えられた。そのためか、南方で敷石幅が 1.4 メートルあるにかゝらずこの附近が 1.1 メートルの狭いのも石段の突出によって敷石が幅狭になったものかとも推想された。

西北地区には殆んど瓦は遺存しなかったが、南東地区では、石組溝の内側に幅 2.

4メートル程にわたって、瓦の推積があって、鏝・宇瓦が交っていた。

(3) 金堂跡調査の結果

金堂内部二地区の発掘結果は、礎石は既に完全に取除かれており、それ等を支えたグリ石も大半同時に取除かれたようで、基壇築造に際して、地固め石として布置された石が残存するに過ぎなかったが、地固め石の空白部分を検討した結果、次の如く考えられた。

東西に於いては、石組溝から1.1メートルの敷石部、これに続く基壇があり、その幅2.4メートルで外側一の礎石となり、正面に計8箇、南北に於いては、石組溝内側から1.6メートルの敷石部があって、ここから基壇が立上り、それから2.4メートル内方に才一礎石があって、南北は計5箇が並んでいたものと考えられた。

即ち建造物の規模は

東西の長さ24.4メートル

南北の長さ14.4メートル

柱間は

東西は

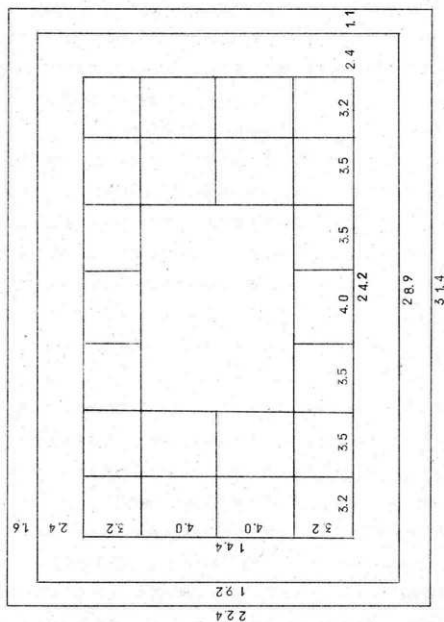
3.2・3.5・3.5・4.0・3.5・3.5・3.2 (メートル)

南北は

3.2・4.0・4.0・3.2 (メートル)

となると考えられる。

信濃国分寺僧寺金堂



2. 塔 跡

塔跡については、昭和31年3月の調査で一応金堂跡の東南にあたり、中軸線から70メートルの辺に、基壇の立ち上り状の痕跡を見出し、これをもととして調査を進めたのであった。しかし当時はまだ個人の所有地であり徹底的に調査することは不可能であった。したがって心礎や四天柱礎や側柱礎の根固め栗石等の確認もできず、これを塔跡と断定することには他日に待つものが多かった。今回は、幸いに、土地も市に買収され、自由に発掘の鉤を入れることができたので、かなり広汎な範囲にわたって発掘した。

はじめ、トレンチによって前年の調査の箇所を掘り進めてゆくと、当時推定した地域よりもやや西寄りの部分で、地表下約40センチ下に、径45センチぐらいの表面が平らかで周縁の円形に近い座りのよい石を発見した。この部分は、土もかなり堅くしまっており、遺構の一部を構成するものとも思われた。したがって、これを目安として西に追うとともに、さらに南と北にもトレンチをあけた。南の方には、同じ面で、小石塊などのかなり散乱しているところもあり、物の基壇と思われる公算が大となった。このようにして、この地域について探求を進めてゆく中に、幸いに、塔の心礎の根固め栗石とみとめられる見事な遺構を発見することができた。

この心礎の根固め栗石は、あたかも、金堂と講堂とを結ぶ南北中軸線の東62メートル(約205尺)で、金堂の中心から南に46.6メートル(約154尺)の点にあたる。この栗石群は、南北に長い楕円状に近い外廓をなすもので、中はくぼんでおり、あたかも掘鉢状の土壇の側縁や壁に石塊を構築している状態を示している。側縁の栗石は地表下約40センチ前後ぐらい下に見出されるもので大体35センチ前後ぐらいの大きい河原石を用いている。内部のくぼみの縁にも同大の河原石を二段又は三段に積築している。内部にも、まわりから順落したとみなされる大きい石塊があったが、これらを取り上げ、当時の栗石と土壇状のく

ほみの全貌を顕現させた。下底は、周縁よりも45センチぐらい深く、6センチ前後の小砂利をもって堅くしきつめていた。土壇状の周廊は、周縁の石塊も含めて、大体 南北3.3メートル東西2メートル前後である。

なお、土地の人の話によると、現在僧寺の西北角に鎮座する国分神社の西の高麗（良）社の社前の石は、この辺から運んだものという。試みにこれをしらべると、やはり楕円状で平かな表面をなし、長さ1.80メートル幅1.26メートルぐらいである。しかし、柱座等の施設は全く見られない。心礎そのものとするとも疑問であるが、一応参考のために記しておく。

四天柱礎石については、根固めの栗石群も明確ではない。しかし、この心礎の位置の推定中心点から西北約2.20メートルはなれて、長さ50センチ幅30センチぐらいのかなり大きい石があり、まわりに石塊も密在しており位位の上から見ても、四天柱礎の栗石群の一にあたるものと推定された。他の三箇所は不明であるが、この南の四天柱礎の推定位置の付近は、かなり土の乱れも著しく、心礎を持ち運んだ際に攪乱されたものとみなされる。

心礎の位置を確認することができたのでこの塔跡をできるだけ広く掘り拡げることにした。もっとも、南寄りの部分は、国鉄の線路にも近い関係で取り止めたが、このほかは、基壇縁の推定線を含めて広く全面発掘した。側柱礎については明らかに根石とみなされるものを確認することはできなかったが、やはり西北隅にあたる部分でかなり大きい石塊の群在している箇所があり、また西がわにも石塊群の散在している痕跡があり、一応の推定は不可能でなかった。

基壇の縁については、地覆石等の明らかなものは検出されなかった。しかし、最初に発見された北がわの上面の平たい円い石はかなり安定した状態で据えられてあり、基壇縁の地覆の一部を構成したものでないかとも考えられ、又西や東南がわの石塊列などから想定するとほぼ基壇の輪廓もたどれるようである。

さて、塔跡はこのように心礎の根固め栗石をのぞいては、四天柱礎や側柱礎の

位置を示す根固め栗石や基壇等について明確な徴証は求められなかったが、残存する石塊群や掘りの安定している平らかな円い石などを考慮に入れると規模も推定されるようである。すなわち、基壇は13.20メートル(約43.6尺)四方とすることも妥当のようである。また四天柱礎の柱間は5メートル(約10尺)と考えることも適当であり、側柱礎は、中央間が広く3メートルで脇間は2.40メートル(約8尺)で7.80メートル(約26尺)四方とすることが妥当であり、側柱礎から約2.70メートル(約9尺)で外縁に達するものとみたい。

一応の推定を記しておきたい。

なお、基壇について、その土層の構成をみるために、東北寄りの部分で、地山まで掘りさげた。この結果大体、地表面から約1.20メートル内外掘りさげて地形したもの、まず地山にあたる礫層の上に約50センチ内外の厚い層に径約25センチ前後の石塊を堅牢に二段又は三段につみその間に小礫利を交えその上に厚さ26センチぐらいに黒褐色の精良な粘土質の土をかさね、さらにその上に厚さ30センチぐらいに黒味のある粘土質の土をおき、その上に、10センチぐらいにやや黄色をおびた白灰色の粘土質の土をおいて基壇面となしている。

3. 僧 房 跡

金堂と講堂とを結ぶ南北中軸線から東約50メートルから60メートルまでの距離にあたり、あたかも金堂の東廻廊の地域一帯には、整備事業にともなう整備を行った際、石塊が一面に散乱している事実をたしかめた。これらの石塊群には、地形固めのために広く敷設した観のあるもの、後世移動攪乱されたものなどいろいろな性格のものがあるように思われたが、中には一見 礎石の 根 固め栗石ともみなされる遺構をもつものもあった。したがって今回の調査は、これらの地域について果たして建物跡が存在したかどうかを確認することに目的をおいた。

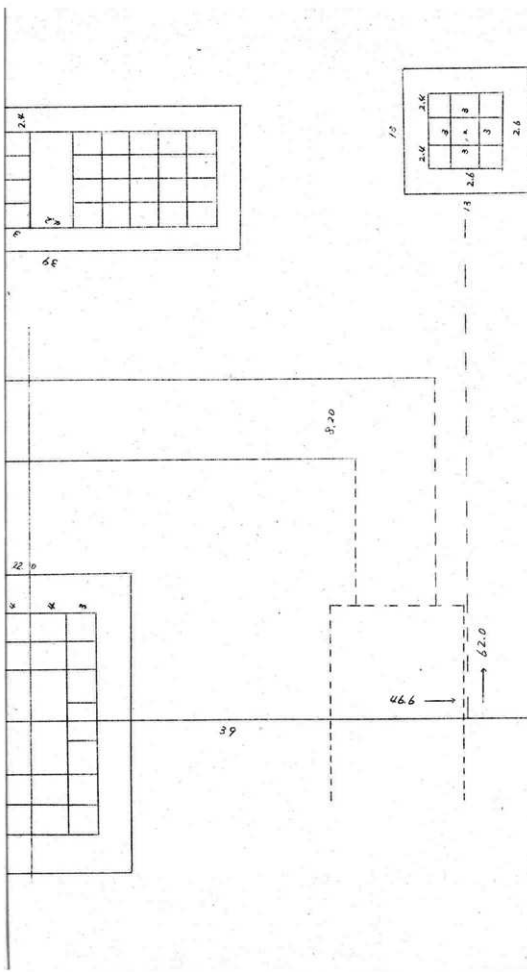
はじめ、東西及び南北に数本のトレンチをあげ、さらにこれから全面的に拡大する方法をとったが、何分石塊の充満散乱がいちじるしく、当時の遺構の一部を識別することに困難をきわめた。しかし、これらの石塊群にまじって、地表下30センチぐらい下に、礎石の根固め栗石群とみとめられるもの数ヶ所検出され、あわせて東寄りの箇所には、土師器等が当初の状態で埋存している状況もみとめられた。根固め栗石群とみとめられるものは、25センチ内外の石塊を用いており内部をややくぼめて堅めたもので外径約60センチぐらいにやや円形をなしている。また、位置は移動しているが、長さ75センチ幅60センチ厚さ30センチぐらいの面の平らかな大きい石もあり、礎石の一つとも考えられるものもあった。このような顕現によって、建物跡の存在を考えられたので、この部分について精査をなした。根固め栗石群とみとめられる箇所の周辺には、同じような20センチ乃至30センチぐらいの自然石塊も散乱しており、これにまじって6センチ内外の小砂利をしきつめたものもあり、礎物の基礎の構成を考えられた。

確實とみなされる礎石の根石から追究してゆくと、この建物は、南北に長い規模のものと思われた。ことに、この南北に長い建物のほど中央辺に東西に走る数石状の遺構も明らかにされた。これは、幅約1.5メートルぐらいにわたって25センチ前後の石塊を堅くしきつめたもので、しかもこの間隙には小砂利をかたくつきかためてうめていた。付近は乱れているが、南北に長い建物でその中央と思われる部分がこのような構造をもっているということは、僧寺内の配置とあわせて考えて僧房とみるのが適当とみなされた。

しかし、その建物の全体の規模となると、不明確な点も多い。梁行については、三間あるいは四間か明らかでない。しかし、周縁の基礎縁とみなされる石塊の存在などから考えると四間とみる方が妥当のようである。もし然らば2.40メートル(約8尺)+2.40メートル+2.40メートル+2.40メートルで全体は9.60メートル(約32尺)となる。そして、東又は西の基礎縁は、それぞれ外の柱

間から、やはり 2.40 メートルはなれて存すると考えたい。桁行については、中央の東西に走る数石遺構を馬通の一部と考えると、その南北の方は、3.3 メートル（約 10 尺）づつの間隔を置いて五間ぐらい考えられる。しかし、その基壇縁は国道に接していて明らかでない。また南の方は、馬通の中心部とみなされる辺から、約 1.950 メートルぐらいで数石群がかなり稀薄になっており、もしこれが建物の端とすると、やはり同じ 3 メートルの柱間で五間ぐらいと考えてよい。もしこれが可能とすると、馬通の幅 4.20 メートル（約 14 尺）で左右にそれぞれ五間づつ延びており馬通の南北の中心は、あたかも 金堂の中心からわずか 3.70 メートルぐらい南に寄っているに過ぎない。なお、建物は南北 3.420 メートル（約 11.3 尺）東西 9.60 メートル（約 2.4 尺）となるわけである。一応の推定を記して他日を待ちたい。

この建物をもって僧房とすると、これに関連して新しい事例を検出することができたことを付記しておく。それは、この建物の東がわ北寄りの部分で、基壇縁の外がわに排水溝の延びていることを明らかにした点である。これは、長さ 50 センチ厚さ 25 センチ乃至 10 センチ前後のかなり大きい石塊を一段或いは二段に組み、深さ 35 センチ幅 27 センチぐらいの溝を構成したもので、これはややカーブしながら東南の方向に走り約 5 メートルで散っている。しかも、外に走るにともない、やや低く傾斜している。基壇縁に接する付近には、土師器の破片が散乱していた。もし僧房とすると、これに付属した一種の溝ともみなされて興味深いものがある。



400 : 1